

## 国際協力特別賞

### 幸せの違い

北海道帯広農業高等学校 2年

森本 錬

「子供達と一緒にいられることが何よりの幸せ。」僕がこの夏フィリピンで出会った、ベルマポートさんの言葉だ。今でもふとした瞬間に、この言葉が胸をよぎる。

僕は、夏のスタディツアーで、フィリピンを訪れた。パヤタス地区での家庭訪問。事前研修での印象は、住民の大半が貧困層、暗く不衛生な町。しかし、僕がこの目で見た実際のパヤタスは、意外にも活気のある町だった。出発前に想像していた光景とは全く違う、人々の力強さと明るさがそこにはあった。パヤタス地区で最貧の家庭を訪問した。僕はそこで、ベルマポートさんに出会った。彼女は7人の子どもを持つ母親だ。夫はスカベンジャー。ゴミ山のゴミを拾って換金し、生計を立てている。収入がわずかなため、一日に一食、食べられるかどうかだ。こんなに厳しい状況で、生きていけるのか、世界には本当にそんな人がいるのかと、率直に思ってしまった。自分の当たり前が跳ね返された。

ベルマポートさんは、パヤタスが好きだと言う。助け合いの気持ちと人との関わりやすさが良いのだそうだ。僕は、どんな厳しい環境の中でも、周りの人々に元気をもらいながら日々を乗り越えているのだろうと解釈した。毎日大変で、生きることに必死な母親、家事と育児で一日が終わってしまう、そんなイメージで見ていた自分が、少し恥ずかしくなった。僕はベルマポートさんに「最近幸せだと思ったことは何か。」と尋ねてみた。すると、子どもといることだと、はにかみながら答えてくれた。その時は、日本人が、子どもへの愛情をあえて言葉で伝えない奥ゆかしさとは違う、フィリピンの方々のはっきりと伝える言葉の重さに凄みを感じた。本当に子どもが大切なのだなと。しかし、改めて「幸せ」について考えていると、ベルマポートさんの言葉の本当の意味について疑問が浮かんできた。子どもといるだけで幸せというベルマポートさん。子どもが大切な気持ちに嘘はないとしても、ベルマポートさんには、幸せの選択肢はいったいいくつあるのか。もしかすると、子どもという一つの選択肢しかないから、それを「幸せ」と伝えたのではないか。僕には、幸せの選択肢は数え切れないほどある。おいしいものを食べた時、友だちと思い出話を語り合った時。僕はひょっとしたら、自分の「幸せ」を基準に考えていたのだろうか。無意識のうちに、ベルマポートさんも、「幸せ」を沢山の選択肢から選ぶのだと決めつけていたのではないのか。ただ一つだけの「幸せ」と、多くの選択肢から選ぶ「幸せ」の違い。自分はベルマポートさんに寄り添って考えることが出来なかったと思い知った。

僕は今まで「幸せ」について改めて考えたりしたことはなかった。いつも家族がいることが当たり前で、それが前提だと思っている自分。ベルマボートさんの家を訪問し、幸せの物差しは、生きているバックボーンの数だけあるのではないかと思うようになった。

僕にとっての幸せは、周りの人の支えがあることだ。家族や周りの人達に対する感謝の気持ちが膨らんだ。ベルマボートさんの胸には、産まれて間もない赤ちゃんがギュッと抱かれていた。安心しきった寝顔に、思わず微笑んでしまった。ベルマボートさんは、幸せの選択肢がない状況にあるかもしれないが、間違いなく子どもといるのが幸せなのだ。

僕は、ベルマボートさんに出会って、幸せについて改めて考えることができた。国や言葉が違って、幸せを求める気持ちは同じなのだ。優しい笑顔で見送ってくれたベルマボートさん。僕はベルマボートさんに手を振りながら、母を思い出していた。

ベルマボートさんに出会って僕は、こんな人たちの支えになる活動をしたい、という思いが強くなった。そのために、教師となり、青年海外協力隊員として活動したい。誰もが幸せを大切にできる世界を作るため役に立つ人になりたいと、強く思う。